

Title	中学・高等学校課程の現行検定教科書を使った教材研究(1)句読法について
Sub Title	Analyses of junior and senior high school textbook (1) Punctuation
Author	志村, 明彦(Shimura, Akihiko)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2011
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 英語英米文学 (The Hiyoshi review of English studies). No.58 (2011. 3) ,p.51- 69
JaLC DOI	
Abstract	In order to find out how writing is taught in junior and senior high school, the current Course of Study for high school, a total of 105 text books and their manuals for teachers were analyzed. The present paper reports a part of this study, with a focus on teaching of punctuation. Results show that most of basic punctuation marks are taught from very early in junior high school, when English sentences are presented for the first time. Teaching of punctuation, however, does not seem to be done from there on until students take reading and writing courses in senior high school. These results based on textbook analyses were partially supported by a small-scale questionnaire study, in which 38 Keio university students were asked about how they learned writing in high school. Also, it was found that a further study on other learning materials used in senior high school is necessary to get a full picture on how punctuation is taught in high school in Japan.
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030060-20110331-0051

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

中学・高等学校課程の現行検定教科書を使った教材研究(1)：句読法について

志村明彦

I. はじめに¹⁾

慶應義塾大学経済学部では、必修科目として1年生の春学期に Study Skills (SS) を履修することになっている。アカデミックな英語の基礎として、リーディング、ライティング、プレゼンテーションのスキルを学ぶ。市販の Zemach and Rumisek (2003) とオリジナルの慶應義塾大学経済学部英語部会編 (2007) を教科書として使用しているが、2011年度に向けて後者を改訂することになり、筆者はライティング・スキルに関する部分の改訂を担当することとなった。そこで、中高英語科でのライティングに関する学習と SS との関連を、教材の観点から明らかにするために、中高の学習指導要領及び文部科学省検定教科書の分析を行なった。本論文では、紙面の都合から、その一部、句読法 (punctuation) について行なった教材研究の結果を報告する²⁾。

句読法の参考書としては、アメリカ英語を中心としたものとして Merriam-Webster (2001) や Strunk and White (2000) 等、イギリス英語では Burchfield (2004) や Ritter (2003) 等、英語学習者向けの参考書としては Swan (2005)、稲盛 (2003)、原田 (1985) 等がある。また、論文作成のための参考書としては、University of Chicago Press (2010) や Turabian (2007)、特に社会科学の分野では American Psychological Association (2010)、言語・文学においては Modern Language Association of America

(2009) 等がある。これらを読み比べると分かるように、句読記号 (punctuation marks) のいくつかについては、アメリカ英語とイギリス英語でその使い方が異なるものがあるなど、英語母語話者の中でも使い方にかなりのばらつきがある。加えて、Truss (2003) が多くの実例をもって指摘するように、イギリスでは句読法の誤用が氾濫しており、また、同書がアメリカでもベストセラーになったことを考えると、これはイギリスだけの問題ではなさそうである。本論文では、この興味深い句読法について、中学校・高等学校課程の学習指導要領及び検定教科書を分析し、大学課程英語科のテキスト、特にライティング学習の教材を作成する際の基礎資料としたい。

II. 教材研究

1. 学習指導要領の分析

学校教育法（第 49・62 条）により、文部科学省検定教科書が中高での主たる教材となっている。しかし、検定教科書の分析の前に、まず、学習指導要領における句読法の扱いについて検討する。これは、検定教科書が、義務教育諸学校教科用図書検定基準及び高等学校教科用図書検定基準により、学習指導要領に基づいて検定されているからである。中高の学習指導要領は、それぞれ平成 20 年 3 月と平成 21 年 3 月に改正された。しかし、その内容の周知とこの新要領に基づく教科書の編集・検定・採択に時間がかかる関係で、新学習指導要領による学校教育の実施は、中学校は平成 24 年から全学年で行なわれ、高等学校については平成 25 年から学年進行で実施されることになっている。よって、本論文の対象とする学習指導要領は、中学校課程については平成 10 年 12 月に告示、高等学校課程については平成 11 年 3 月に告示され、ともに平成 15 年 12 月に一部改正された現行学習指導要領とする。

(1) 中学校課程

現行学習指導要領の第9節外国語の第2.2.(3)に、中学校三年間で扱われる「学習材料」の一覧があるが、句読法については、「イ.(イ)終止符、疑問符、コンマ、引用符、感嘆符などの基本的な符号」(92)となっている。なお、学習指導要領の内容を、文部科学省が具体例とともに詳しく解説したものに『中学校学習指導要領解説』があるが、その『外国語編』によると：

終止符 (.), 疑問符 (?), コンマ (,), 引用符 (“”), 感嘆符 (!) などの基本的な符号の使い方や意味を理解させる必要がある。この改訂では対話文でよく用いられる引用符を新たに加えたが、他に、アポストロフィ (') やコロン (:) なども教材に応じて指導することが考えられる。(37)

となっている。ここにある句読記号(7項目)が中学校課程の現行検定教科書で扱われていることが予想される。

(2) 高等学校課程

高等学校課程では、中学校学習指導要領にある言語材料(上記)と『高等学校学習指導要領』に示された「言語材料」(128-129)のなかから、高等学校課程に設置された英語科目(英語I、英語II、リーディング、ライティング、オーラルコミュニケーションI [OCI]、オーラルコミュニケーションII [OCII]の6科目)それぞれの目標を達成するのにふさわしいものを適宜用いるとなっている。しかし、高等学校学習指導要領及び『高等学校学習指導要領解説外国語編英語編』の言語材料に関する記述の中に、punctuationに関する項目はなく、高校では中学校指導要領で示された項目の学習をするようである。よって、高校の検定教科書では、句読法に関しては、中学校課程と大きく変わらないことが予想される。

2. 検定教科書の分析

(1) 中学校課程

日本出版労働組合連合会（2010）によると、教科書の発行は全体的に寡占化が進んでおり、とりわけ中学校課程では広域採択制度の導入によりその傾向が強く（高橋 176）、現在 6 社から 6 種類の英語科教科書が出版されているのみである。これら 6 種類の教科書を 3 学年分、計 18 冊と、その Teacher's Manuals（TM）18 冊を分析の対象とした³⁾。なお、これら教科書のタイトル、出版社名、平成 22 年度のシェア、扱われている句読記号の分析結果を表 1 にまとめた。

表 1 中学校英語科検定教科書の分析結果一覧

タイトル (略号)	出版社	シェア	終止符	疑問符	感嘆符	コロン	セミコロン	コンマ	ダッシュ	引用符	アポストロフィ	他
New Horizon (NH)	東京書籍	45.1	1	1	1			1		2	1	大文字(1)、スペース(1)
New Crown (NC)	三省堂	20.2	1	1	2	2		1	2	2	1	ハイフン(2)、省略の点(2)
Sunshine (SS)	開隆堂出版	16.9	1, 3	1*, 3	1*, 3	3		1, 3	3	1*, 3	1*, 3	ハイフン(1, 3)、大文字(1)、スペース(1)、省略の点(1, 3)
Total (TO)	学校図書	9.9	1	1	1*			1		1*	1	スペース(1)、大文字(1)
One World (OW)	教育出版	6.5	1	1	1			1	3	1	1	大文字(1)、スペース(TM1)、イタリック(1)、!? (1)、ハイフン(2)
Columbus 21 (CO)	光村図書出版	1.4	1	1	1	1*		1	1	1	1	ハイフン(1)

(注)・シェア情報は、文部科学省の 2009 年の調査（報道発表）に基づく。

・表中の数字は学年を表す（例、「1」は中学 1 年の教科書）。

・* は Teacher's Manual（TM）のみでの扱いを意味する。

中学校学習指導要領に学習材料として記載されている「終止符」・「疑問符」・「コンマ」・「引用符」・「感嘆符」に加えて、同解説に記載の「アポストロフィ」と「コロン」は、全ての教科書で扱われていた。指導要領には載っていないが教科書に登場する符号としては、「ハイフン」・「(文頭や固有

名詞などの) 大文字]・「スペースの使い方」(教科書4種)、「コロン」(3種)、「省略の点(…)」(2種)、「イタリック」と「!？」(ともに1種)があった。

句読法導入のタイミングは、共通して、1年時で、最初に英語が文で登場するレッスンでとなる。よって、1年生の1学期というかなり早い段階で句読法に触れることになる。しかし、句読記号がすべて同時に導入されるわけではなく、教科書によって多少の違いがある。NH、NC、SS、TOでは、主なものが早い段階でまとめて紹介され、残りの句読記号は、教科書本文中で初めて使われる際に紹介されたり(NH)、2年・3年時の教科書でまとめて導入されている(NC, SS)⁴⁾。これら4種の教科書では、句読法がまとめて導入されるので、個々の句読記号だけでなく、句読法そのものについてまとめた指導がしやすい。一方、OWとCOでは、テキストの本文にそれぞれの符号が初めて使われる時に、教科書のページの下部に注という形で、個別に取り上げられている。

以上のように、導入の方法には違いがみられるが、どの教科書でも中学校1年時、しかもかなり早い段階から、学習指導要領に書かれている基本的な句読法が学習されていることがわかる。

(2) 高等学校課程

高等学校課程における句読法の扱いは、学習指導要領の内容(上記II.1.(2)参照)から判断すると、中学校課程とあまり変わらないことが予想できる。以下では、高等学校で使われる英語科の検定教科書を、科目ごとに分析する。

高等学校課程に設置される英語科目(6科目)のうち、主にスピーキングとリスニング、つまり話し言葉の学習が中心となる「OCI」と「OCII」では、書き言葉で使われる句読法は扱われていなかった。OCIの教科書は20種(TMは19種)、OCIIは6種(4種)あるが、OCIについてはシェアのトップ10(シェア合計80.8%)の教科書及びTM(表2参照)を、そして、OCIIについては6種全ての教科書とTM(表3参照)

を分析した。しかし、句読法に関する記述はなく、これらの科目で句読法を学ぶことはないと思われる。

表 2 オーラルコミュニケーションⅠ 検定教科書の分析結果一覧

タイトル	出版社	シェア	終止符	疑問符	感嘆符	コロソ	セミコロン	コンマ	ダッシュ	引用符	アポストロフィ	他
Hello there!	東京書籍	15.6										
Voice	第一学習社	10.3										
Sailing	啓林館	9.8										
SELECT	三省堂	9.3										
On Air	開拓社	7.8										
EXPRESSWAYS Standard Ed.	開隆堂	7.2										
Departure	大修館	6.7										
Birdland	文英堂	5.9										
EXPRESSWAYS Advanced Ed.	開隆堂	4.5										
Planet Blue	旺文社	3.7										

(注)・シェア情報は、文部科学省の2009年の調査(報道発表)に基づく。

・OCⅠの教科書は全部で20種出版されており、これらシェアトップ10の合計シェアは80.8%となっている。

表 3 オーラルコミュニケーションⅡ 検定教科書の分析結果一覧

タイトル	出版社	シェア	終止符	疑問符	感嘆符	コロソ	セミコロン	コンマ	ダッシュ	引用符	アポストロフィ	他
Open Door	文英堂	31.8										
Birdland	文英堂	18.9										
Voice	第一学習社	18.3										
EXPRESSWAYS	開隆堂	16.8										
SCREENPLAY	フォーイン	7.4										
Emphathy	三省堂	6.7										

(注)・シェア情報は、文部科学省の2009年の調査(報道発表)に基づく。

・OCⅡの教科書は全部で6種出版されている。

次に、4スキル(リスニング・スピーキング・リーディング・ライティング)をバランスよく学習する「英語Ⅰ」と「英語Ⅱ」の教科書を検討する。英語Ⅰ・英語Ⅱ、ともに、教科書が36種、TMは33種ある。両科目とも、シェアトップ10(シェア合計がそれぞれ58.7%と60.1%)の教科書及びTMを分析したが、これらの科目においても、その教科書に句読

法に関する記述はなく、句読法を学ぶことはなさそうである（表4・5参照）。

表4 英語Ⅰ 検定教科書の分析結果一覧

タイトル	出版社	シェア	終止符	疑問符	感嘆符	コロン	セミコロン	コンマ	ダッシュ	引用符	アポストロフィ	他
Crown I	三省堂	9.3										
All Aboard! I	東京書籍	8.3										
Power On I	東京書籍	7.3										
PRO-VISION I	桐原書店	6.6										
BIG DIPPER I	数研出版	5.3										
VISTA I	三省堂	5.3										
UNICORN I	文英堂	4.3										
WORLD TREK I	桐原書店	4.3										
PROMINENCE I	東京書籍	4.1										
Vivid	第一学習社	3.9										

(注)・シェア情報は、文部科学省の2009年の調査（報道発表）に基づく。
 ・英語Ⅰの教科書は全部で36種出版されており、これらシェアトップ10の合計シェアは58.7%となっている。

表5 英語Ⅱ 検定教科書の分析結果一覧

タイトル	出版社	シェア	終止符	疑問符	感嘆符	コロン	セミコロン	コンマ	ダッシュ	引用符	アポストロフィ	他
CROWN II	三省堂	9.9										
VISTA II	三省堂	7.2										
PRO-VISION II	桐原書店	7.0										
Power On II	東京書籍	6.7										
All Aboard! II	東京書籍	5.6										
BIG DIPPER II	数研出版	5.5										
UNICORN II	文英堂	4.9										
WORLD TREK II	桐原書店	4.7										
PROMINENCE II	東京書籍	4.4										
Vivid II	第一学習社	4.2										

(注)・シェア情報は、文部科学省の2009年の調査（報道発表）に基づく。
 ・英語Ⅱの検定教科書は全36種類が出版されており、これらトップ10のシェア合計は60.1%となっている。

句読法の学習が期待できるのは、書き言葉を中心に扱う「リーディング」及び「ライティング」という科目の教科書である。よって、これらの科目については、全ての検定教科書及びTMの分析をした。「リーディング」には28種の教科書(25種のTM)があるが、表6にあるように、何らかの形で句読法を扱っているものは僅か10種(35.7%)しかなかった。しかも、中学校課程の教科書のように、句読法の主なものをまとめて紹介しているのはBD、PS、MSのみで、読解に役立つものとして句読記号の一部のみが扱われたり(VO、GE)、リーディング・ストラテジーであるスラッシュ・リーディングの導入と関連して、これも句読記号の一部のみが紹介されている(EX、PN、PO)⁵⁾。すなわち、リーディング科目では、句読法そのものをまとめて学ぶ機会は少なく、むしろ、リーディングに関連する、リーディングに役立つ句読符号のみについて、句読法を部分的に学ぶことになっているようである。

高等学校課程の英語科科目の中で、最も句読法が扱われる可能性が高いのが「ライティング」である。表7にあるように、全部で23種の検定教科書がある(TMは21種)。そして、予想どおり、少数の例外(UN、BD、VI)を除き、ほとんどの教科書において、外国語として英語を学ぶ日本の学習者に十分な種類の句読法が扱われていた。そこでは、中学校の教科書で扱われていた基本的な句読記号に加えて、中学校ではほとんど扱われてなかったコロンのようにまったく扱われることのなかったセミコロン等、中級以上の学習者に必要な句読記号も含まれていた。一方、句読法の導入方法については、特定のLessonの中で扱われることはなく、Lessonとは独立した形で、一回ないし二回にまとめて、例文とともに解説されている。なお、教科書のどこで扱われているかについては3つのパターンが見られた。まず、巻末に付録としてまとめられているものが、10種(PV、CR、EL、WT、PO、UN、EX、IN、PB、MH)ある。次に多いパターンが、表紙ないしは裏表紙の裏にまとめられているもので、9種(PS、BD、VI、GE、VO、NA、SU、MS、CO)でこの方法が採用されている。これら2つのパターン

表6 リーディング検定教科書の分析結果一覧

タイトル (略号)	出版社	シェア	終止符	疑問符	感嘆符	コロソ	セミコロソ	コンマ	ダッシュ	引用符	アポストロフィ	他
CROWN (CR)	三省堂	10.7										
ELEMENT Reading Skills Based (ER)	啓林館	10.0										
Vivid (VI)	第一学 習社	6.7										
BIG DIPPER (BD)	数研出 版	6.3	○			○	○	○	○	○		ハイフン、 括弧、スラ ッシュ、イ タリック
POLESTAR (PS)	数研出 版	6.1	○			○	○	○	○	○		ハイフン、 イタリック
Power On (PO)	東京書 籍	5.3										
ORBIT (OR)	三省堂	4.8								○*		
PRO-VISION (PV)	桐原書 店	4.8										
EXCEED (EX)	三省堂	4.4	○					○				
Surfing (SU)	文英堂	4.0										
UNICORN (UN)	文英堂	3.8										
POWWOW (PW)	文英堂	3.6										
Voyage (VO)	第一学 習社	3.5				○			○			
ELEMENT (EL)	啓林館	3.1										
WORLD TREK (WT)	桐原書 店	3.1						○				インデンテ ーション
DAILY (DA)	池田書 店	3.0										
PROMINENCE (PN)	東京書 籍	3.0	○	○	○			○				
MAINSTREAM (MS)	増進堂	2.3	○	○	○	○	○	○	○	○	○	ハイフン
NEW STAGE (NS)	池田書 店	2.1										
NEW STREAM (NS)	増進堂	1.9										
Genius (GE)	大修館 書店	1.8				○	○		○			
Planet Blue (PB)	旺文社	1.3										
COSMOS (CO)	三友社 出版	1.1										
SUNSHINE (SU)	開隆堂	1.0										
Maig Hat (MH)	教育出 版	1.0										
PLUS ONE (PO)	開隆堂	0.8				○	○	○				
Sparkle (SP)	旺文社	0.3										
NEW LEGEND (NL)	開拓社	0.2										

(注)・リーディングの検定教科書は全28種類が出版されている。
 ・シェア情報は、文部科学省の2009年の調査(報道発表)に基づく。
 ・*はTeacher's Manual(TM)のみでの扱いを意味する。

表7 ライティング検定教科書の分析結果一覧

タイトル (略号)	出版社	シェア	終止符	疑問符	感嘆符	コロ	セミコ ロン	コンマ	ダッ シュ	引用符	アポスト ロフィ	他
PRO-VISION (PV)	桐原書 店	9.6	○	○	○	○	○	○	○	○	○	タイトル、イン デンテーション、 ハイフン、括弧
CROWN (CR)	三省堂	9.1	○	○	○	○	○	○	○	○	○	ハイフン
POWWOW (PW)	文英堂	7.7	○	○	○	○	○	○	○	○	○	ハイフン
POLESTAR (PS)	教研出 版	7.7	○	○	○	○	○	○	○	○	○	インデンテーシ ョン、ハイフン、 括弧、ブラケット
ELEMENT (EL)	啓林館	7.6	○	○	○	○	○	○	○	○	○	ハイフン
WORLD TREK (WT)	桐原書 店	6.9	○	○	○	○	○	○	○	○	○	ハイフン、大文 字、イタリック
Power On (PO)	東京書 籍	6.8	○	○	○	○	○	○	○	○	○	インデンテーシ ョン、イタリッ ク、ハイフン、括 弧*、大文字*、 省略の点*、ブ ラケット*
UNICORN (UN)	文英堂	6.0	○			○	○	○	○			インデンテーシ ョン、括弧
BIG DIPPER (BD)	教研出 版	4.6				○	○	○				
Vivid (VI)	第一学 習社	4.5	○					○				
EXCEED (EX)	三省堂	4.1	○	○	○	○	○	○	○	○	○	ハイフン
Genius (GE)	大修館	3.4	○	○	○	○	○	○	○	○	○	下線、ハイフン、 省略の点
Voyager (VO)	第一学 習社	3.3	○	○	○	○	○	○	○	○	○	ハイフン
PRACTICAL (PR)	池田書 店	3.1	○	○	○	○	○	○	○	○	○	ハイフン
PROMINENCE (PN)	東京書 籍	2.3	○	○	○	○	○	○	○	○	○	インデンテーシ ョン、ハイフン、 イタリック
Planet Blue (PB)	旺文社	2.2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	ハイフン、括弧、 []、スペース、イ タリック、大文字
INTERFACE (IN)	日栄社	2.1	○	○	○	○	○	○	○	○	○	括弧、スラッシュ
NEW ACCESS (NA)	開拓社	2.0	○	○	○	○	○	○	○	○	○	ハイフン
DAILY (DA)	池田書 店	2.0	○	○	○	○	○	○	○	○	○	ハイフン、大文 字、イタリック
SUNSHINE (SU)	開隆堂	1.9	○	○	○	○	○	○	○	○	○	インデンテーシ ョン
MAINSTREAM (MS)	増進堂	1.5	○	○	○	○	○	○	○*	○	○*	イタリック、ハ イフン*、省略 の点*、括弧*、 ブラケット*、 スラッシュ*
COSMOS (CO)	三友出 版	1.2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	ハイフン、イタ リック
Magic Hat (MH)	教育出 版	0.5	○	○	○	○	○	○	○	○	○*	インデンテーシ ョン、イタリッ ク、ハイフン、大 文字*

(注)・シェア情報は、文部科学省の2009年の調査(報道発表)に基づく。

・*はTeacher's Manual(TM)のみで扱われていることを示す。

の場合、必要な時に情報が見つかりやすく、リファレンス的に使いやすいが、教科書の各レッスンとははっきり区別されているので、レッスンの内容と関連付けて利用されることは少ないか、場合によっては授業中に取り上げることはしないで、「見ておくように」と言った指導がなされる可能性が高いと思われる。それに対して、5種（PW, PR, PN, DA, MS）の教科書では、教科書の途中にコラムという形で句読法を紹介している。PWでは、全42レッスンが3つのユニットに分かれているが、最初の2つのユニットは文法シラバスで構成され、主に単文のライティングをし、Unit 3でパラグラフ・ライティングをするが、句読点に関するコラムはUnit 1とUnit 2の間にあった。PRは、全体的に2つのパートから構成され、最初のパートでは文法シラバスに従って単文ライティングの練習をし、後半のパートではトピック別シラバスを使い、複数の文を書く練習をするが、句読法はPart 1の最後で導入されていた。また、PNでは、最初の15ページで文法が復習されたあと、句読法のコラムがあり、それから、テーマ別シラバスに基づいてライティングをするPart 1が始まっている。一方、DAは、文法シラバスのPart 1、機能シラバスのPart 2、トピック別シラバスのPart 3から構成されるが、Part 1とPart 2の間に句読法のコラムがある。最後に、MSは、Part 1で文法シラバスの単文ライティングとパラグラフ・ライティングの基礎知識を、Part 2でパターン別のパラグラフ・ライティングを、そして、Part 3ではよりまとまったライティングを学習するが、句読法は2回のコラムに分けられてPart 1の中で導入されている。これらの教科書の場合、教科書途中にコラムがあり、リファレンス的には使いにくい、基本的に単文の英作文から複数の文でのライティングに移る時に句読法に関するコラムが用意されており、より授業時間中に扱われる可能性が高いと思われる。

3. 新学習指導要領と句読法の学習

Section II.1でも書いたように、小学校及び中学校課程の学習指導要領

は平成 20 年 3 月に、高等学校課程は平成 21 年 3 月に改正された。この新学習指導要領による教育の実施は、小学校課程は平成 23 年度、中学校は平成 24 年度から全学年で実施される。高等学校については平成 25 年度から学年進行で実施されることになっている。本研究の調査対象は現行の学習指導要領と検定教科書ではあるが、新学習指導要領についても簡単に分析し、これからの学校英語教育における句読法の指導がどうなるのか予想してみたい。

新学習指導要領で、小学校 5・6 年時に「外国語活動」が新設された。よって、全ての小学校で 5 年時より、週 1 回、外国語活動の授業が行なわれることとなった。同第 4 章外国語活動の「第 3 指導計画の作成と内容の取扱い」の項目 1 (1) には、「外国語活動においては、英語を取り扱うことを原則とすること」(95) とあり、小学生は英語の学習をすることになる。ただし、「外国語でのコミュニケーションを体験させる際には、音声面を中心とし、アルファベットなどの文字や単語の取り扱いについては、児童の学習負担に配慮しつつ、音声によるコミュニケーションを補助するものとして用いる」(96) となっており、さらに『小学校学習指導要領解説外国語活動編』では、「アルファベットなどの文字の指導については、例えば、アルファベットの活字体の大文字及び小文字に触れる段階にとどめ(中略)読むこと及び書くことについて、音声面を中心とした指導を補助する程度の扱いとするよう配慮」(22) とあり、句読法の指導はされないことが予想される。実際、この「外国語活動」の主たる教材となる文部科学省発行『英語ノート 1』と『同 2』を分析したが、句読法に関する教材はなかった⁶⁾。

一方、中学校・高等学校課程の新学習指導要領及び解説も調査したが、少なくとも句読法の学習については変更がなかった。以上を総合して考えると、新学習指導要領では、小学校 5 年より、これまでより早期に英語の学習が始まるが、句読法の指導については現行と違いはないと予想される。学習指導要領の改訂はこれまで約 10 年毎に行なわれてきた。よって、

今回の現行学習指導要領及び現行検定教科書に関する分析結果は、今後あと 10 年程度は有効であると言えるであろう。

III. まとめ

大学課程英語科のテキスト、特にライティング学習の教材を作成する際の基礎資料として、句読法について、中学校及び高等学校課程の現行学習指導要領と検定教科書を分析した。中学校課程では、学習指導要領の内容を受け、コロンやセミコロン等を除く、基本的な句読記号と句読法が、全ての教科書で 1 年時から導入されていた。一方、高等学校課程では、学習指導要領に、句読法に関する追加事項は見当たらず、実際、OC I、OCII、英語 I、英語 II などの科目ではその教科書に句読法に関する記述を見つけることはできなかった。しかし、リーディングでは、リーディングに役立つ句読記号に限られるが、約 35% の教科書で句読法が扱われ、また、ライティングでは、ほとんど全ての教科書において、コラムや付録の形で、教科書の各レッスンとは独立した形で、日本人学習者にとって十分な句読法に関する情報が掲載されていた。

ところで、本論文の著者は、2010 年度秋学期に担当した英語科目 (2 クラス) で、慶應義塾大学経済学部生 38 名を対象に、中高でのライティングの学習に関する簡単なアンケート調査を実施した⁷⁾。同調査では、32 名 (84.2%) が中学校時代に検定教科書を使っていたことが分かった (なお、教科書名を覚えてなかった 3 名の学生を除けば 91.4% の学生が中学校時代に検定教科書を使っていたことになる)。大学生の 9 割前後が中学校課程で検定教科書を使い、本研究で明らかになったように、基本的な句読法の学習をしたであろうことが推測できる。一方、高等学校については、アンケートに答えた全員がライティングを履修していたが、検定教科書を使っていたのは、わずか 13 名 (34.2%) であった。よって、今回の調査で明らかになったような、検定教科書を使い句読法についてまとまった学習をしている高校生は、3 割程度しかいない可能性がある。残りの学生に

については、他の教材（アンケート調査によると、何を使ったか覚えていない者が10名、それぞれの学校の自主教材を使用した者が3名、市販のライティング教材を使った者が1名）を使っており、これらの教材についても分析をする必要がある。

また、同じアンケートで、中高の授業以外で句読法を学んだことがあるかについて尋ねたところ、29名（76.3%）は「ない」と答えたが、9名（23.7%）は塾・予備校で、1名（2.6%）は参考書（襖他著『高校総合英語 Forest』）を使って個人的に学習したと答えている。教材の側面から中高と大学課程の学習内容の連続性を考える上では、これらの教材についても調査する必要があると思われる。

さらに、大学課程の教材を作成するに当たっては、検定教科書以外の教材の調査に加えて、少なくとも、次の2つの調査をする必要があるだろう。

ひとつは、中高生が触れる英語（例えば、テキストの本文や例文等）の中で、句読法がどのように使われているのかに関する調査、つまり中高の英語科教材のコーパス研究である。句読法の学習には、意識的な学習と偶発的な学習があると考えられるが、本研究は、中高生が、検定教科書を使って、どのように意識的に句読法を学習しているかについて調査したものである。しかし、テキストの本文や例文等、大量の英語に触れることによって、偶発的に句読法を学ぶことも考えられるので、教材の英語をコーパス化し、分析することによって、偶発的な学習についての調査をする必要があると思われる。ただし、今回の検定教科書分析、特にTMの分析を通して、この点については次のことが予想される。TMの多くには、その教科書を作成する際に参考とした（主要）文献の一覧が記載されている。今回の調査で、中高あわせて計95種のTMを分析したが、その内、56種（58.9%）に（主要）参考文献一覧が書かれていた。さらに、参考文献一覧のあるTMのうち、33種（58.9%）のTMに、句読法に関する文献（本稿冒頭にあげた参考書等）があった。そして、その内の28種（84.8%）で、Swanの*Practical English Usage*があげられていた⁸⁾。よって、多くの教

科書では、Swan の句読法を参考に、テキストの本文等が書かれていると予想される。繰り返しになるが、本論文で報告した検定教科書の分析だけでは、中高大の英語教材の連続性を考えるには不十分であり、ここに書いたようなコーパス調査や下を書く句読法の学習実態調査が必要であるが、中高と大学の教材に関する連続性を考える際に、*Practical English Usage* を基本としてもいいかもしれない。

いまひとつは、高校卒業時の句読法の習得レベルに関する実態調査である。例えば、大学入学時のできるだけ早い機会に、多様な句読記号を使ってライティングする機会を設け、その内容を調査することができる。

今回は、紙面の都合で、句読法に関する調査結果のみを報告することとしたが、その調査方法はライティングに限らず、他の学習項目についても応用できる。中学・高等学校課程の教材と大学課程の教材との連続性を高めるためにも、この手の教材に関する基礎研究がなされることを期待したい。

注

- 1) 文部省刊行物及び教科書の表記の基準として、同省が1946年に発表した『くぎり符号の使ひ方 [句読法] (案)』では、日本語の横書きは普通「,」と「。」を使うとある。また、1950年に同じく文部省が発表した『国語の書き表し方』や、公務員が公文書を作成する際の手引で1951年に国語審議会総会が議決決定した『公用文作成の要領』でもこの使い方をすることになっている。実際、渡部(1995)によると、日本の教科書のほとんどにおいて「,」と「。」が使われているようであるが、他省の文書や一般の文書では「,」と「。」が使われている。ちなみに、共同通信社(2020)でも後者の使用を勧めており、報道分野でもこちらが使われている。渡辺は、その理由のひとつにパソコンで使われているワープロ・ソフトの設定がデフォルトで後者になっていることをあげているが、句読法に関する本論文では、ワープロで作成することもあり、この組み合わせを使うこととする。
- 2) 句読法に加え、パラグラフ・ライティング、エッセイ・ライティングについても調査した。その結果については後日発表予定である。
- 3) TMについては、書店での販売はもちろん、教科書を扱う一部の書店でも

販売されていない。よって、財団法人教科書研究センター付属教科書図書館所蔵のTMを使った。なお、文英堂発行の教科書については、TMが公開されていなかった。よって、論文中で分析した教科書とTMの総数が異なっている。

- 4) なおTOではLesson 1の終わりに主な句読記号が紹介されるが、その後、3年卒業時まで、教科書で句読法が扱われることはない。なお、追加の句読記号（感嘆符・引用符）については、1年生用教科書のTMにその記述がみられた。
- 5) ORでは、教科書中に句読法の記述はないが、TMに句読法の使い方についての解説があった。また、WTでは、Lesson 11と12の間にある「Writing a Letter in English」というコラムで、コンマとインデンテーションが紹介されている。
- 6) だからと言って、これらの教材で句読記号が全く使われていないわけではない。小学校5年生が使う『英語ノート1』では、単語や短い表現を学ぶための教材が提供されており、学習者が使う表現（e.g., Hello.）の中に終止符が使われたり、レッスントイトル（e.g., Lesson 2 I'm happy.）、学習活動や英語の歌のタイトル（e.g., What would you like? や Sunday, Monday, Tuesday）に、アポストロフィ、疑問符、コンマが使われている。6年生が使う『英語ノート2』では、Lesson 1でアルファベットが導入され、学習活動の中に文も使われるようになるが、句読記号については、アポストロフィ、疑問符、終止符が使われている。
- 7) このアンケートでは、中高における句読法の学習だけでなく、パラグラフ・ライティングの学習についても調べている。
- 8) Swan以外の句読法に関する文献としては、University of Chicago Press, Seely, Sinclair等が複数のTMで使われていた。

参考文献

（注：本研究で調査した教科書（中学校課程18種・高等学校課程87種）及びTeacher's Manuals(TM)（中学校課程18種・高等学校課程77種）については、スペースの都合上、参考文献一覧に記載しない。本文中の表1～7を参照のこと。）

American Psychological Association. *Publication Manual of the American Psychological Association, 6th Edition*. Washington: American Psychological Association, 2010. Print.

Burchfield, R. W. *Fowler's Modern English Usage, Revised 3rd Edition*. Oxford: Oxford UP, 2004. Print.

- Cappon, Rene J. *The Associated Press Guide to Punctuation*. New York: Basic Books, 2003. Print.
- Evans, Bergen and Cornelia Evans. *A Dictionary of Cotemporary American Usage*. New York: Random House, 1957. Print.
- Garner, Bryan A. *A Dictionary of Modern American Usage*. New York: Oxford UP, 1998. Print.
- Lukeman, Noah. *A Dash of Style: The Art and Mastery of Punctuation*. New York: W. W. Norton & Company, 2006. Print.
- Merriam-Webster. *Merriam-Webster's Guide to Punctuation and Style, 2nd Edition*. Springfield: Merriam-Webster, 2001. Print.
- Modern Language Association of America. *MLA Handbook for Writers of Research Papers, 7th Edition*. New York: The Modern Language Association of America, 2009. Print.
- Parkes, M. B. *Pause and Effect: An Introduction to the History of Punctuation in the West*. Hants: Scholar Press, 1992. Print.
- Ritter, R. M. *Oxford Style Manual*. Oxford: Oxford UP, 2003. Print.
- Seely, John. *Oxford A-Z of Grammar & Punctuation*. Oxford: Oxford UP, 2009. Print.
- Sinclair, John et al. *Collins COBUILD English Usage*. Glasgow: HarperCollins Publishers, 2006. Print.
- Strunk, William Jr. and E. B. White. *The elements of style, 4th Edition*. New York: Longman, 2000. Print.
- Swan, Michael. *Practical English Usage, Third Edition*. Oxford: Oxford UP, 2005. Print.
- Trask, Robert. L. *The Penguin Guide to Punctuation*. London: Penguin, 1997. Print.
- Truss, Lynne. *Eats, Shoots & Leaves: The Zero Tolerance Approach to Punctuation*. New York: Gotham Books, 2003. Print.
- Turabian, Kate L. *A Manual for Writers of Research Papers, Theses, and Dissertations: Chicago Style for Students and Researchers, 7th Edition*. Chicago: The U of Chicago Press, 2007. Print.
- University of Chicago Press. *The Chicago Manual of Style, 16th Edition*. Chicago: The U of Chicago Press, 2010. Print.
- Zemach, Dorothy E. and Lisa A. Rumisek. *Success with College Writing*. Macmillan Languagehouse, 2003. Print.

- 稲盛洋輔『英語の句読法辞典』（インターワーク社、2003）
- 大類雅敏『句読点活用辞典』（栄光出版社、2006）
- 解説教育六法編集委員会編『解説教育六法 2009 平成 21 年版』（三省堂、2009）
- 共同通信社『記者ハンドブック：新聞用字用語集第 12 版』（共同通信社、2010）
- 慶應義塾大学経済学部英語部会編『Study Skills for College English』（慶應義塾大学出版会、2007）
- 杉本つとむ『杉本つとむ日本語講座 <4> 語彙と句読法』（桜楓社、1979）
- スワン・マイケル『オックスフォード実例現代英語用法辞典第 3 版』（研究社、2007）
- 高橋正夫『英語教育学概論 [改定新版]』（金星堂、2000）
- 日本出版労働組合連合会「2010 年度用 中学校・高等学校教科書の採択結果」『教科書レポート 2010 (No. 53)』（2010）
- 原田敬一『英語句読法の知識と使い方』（南雲堂、1985）
- 襖タカユキ他『高校総合英語 Forest』（桐原書店、2009）
- 文部省『中学校学習指導要領』（大蔵省印刷局、1998）
- 『中学校学習指導要領（平成 10 年 12 月）解説—外国語編—』（東京書籍、1999）
- 『高等学校学習指導要領』（大蔵省印刷局、1999）
- 『高等学校学習指導要領解説外国語編英語編』（開隆堂出版、1999）
- 文部科学省『小学校学習指導要領』（東京書籍、2008）
- 『小学校学習指導要領解説外国語活動編』（東洋館出版社、2008）
- 『中学校学習指導要領』（東山書房、2008）
- 『中学校学習指導要領解説外国語編』（開隆堂、2008）
- 『高等学校学習指導要領』（東山書房、2009）
- 『英語ノート 1』（教育出版、2009）
- 『英語ノート 2』（教育出版、2009）
- 『平成 22 年度使用教科書の需要数集計結果について（中学校用・高等学校用）』文部科学省報道発表平成 21 年 11 月 5 日
- 『高等学校学習指導要領解説外国語編・英語編』（開隆堂、2010）
- 渡部善隆『横書き句読点の謎』March 1995. Web. 10 Jan. 2011. <<http://yebisu.cc.kyushu-u.ac.jp/~watanabe/RESERCH/MANUSCRIPT/OTHERS/YOKO/intro.html>>.

Synopsis

Analyses of Junior and Senior High School Textbooks I: Punctuation

Akihiro Shimura

In order to find out how writing is taught in junior and senior high school, the current Course of Study for high school, a total of 105 text books and their manuals for teachers were analyzed. The present paper reports a part of this study, with a focus on teaching of punctuation. Results show that most of basic punctuation marks are taught from very early in junior high school, when English sentences are presented for the first time. Teaching of punctuation, however, does not seem to be done from there on until students take reading and writing courses in senior high school. These results based on textbook analyses were partially supported by a small-scale questionnaire study, in which 38 Keio university students were asked about how they learned writing in high school. Also, it was found that a further study on other learning materials used in senior high school is necessary to get a full picture on how punctuation is taught in high school in Japan.